



松

本

音楽家

雅

隆

「ロバの音楽座」は、音のらくがき。
子どもたちといっしょなら
もつと自由で新しい音楽を生み出せる。

構成・森納江 写真・山本宗補

三十五年前、「カテリーナ古楽合奏団」を立ち上げた。

きっかけは、クルムホルンという、一度は絶滅した西洋の古楽器だった。

吹いてみると、子どもの頃に聴いた海の音、山の音がした。

以来、世界各地の古楽器を探してきた。

その音たちに、小学生の子どもが「懐かしい」と聴き入り、

臆せず吹いたり弾いたりもしてくれるのが、何より嬉しい。

今、何か楽器を弾こうと思うと、まずは楽器の持ち方などいろんな作法を教えられて、次に音階の出し方を覚えて、段階を踏んで練習をしていきますよね。

楽しんで弾けるようになるまでには、かなり時間がかかる。

それはそれで必要なことだとは思いますが、でも、音楽って本当はもつと自由

で遊びがあったと思うんです。あえて専門的に習わなくても、日常のなかに息づいている。それを子どもたちに伝えたく

て、二十五年前「ロバの音楽座」を始め
たんです。

**古楽器は教える人がいない。
だから、限りなく自由。**

というのも私自身、音楽を楽しめない
時期があったんですね。音楽が好きで好
きで音大に進学したのに、レッスン、テ
クニック、レッスンと追い立てられて、ひ
たすら窮屈。「自分は音楽に向いていな
いんじゃないか」と、本気で悩んだもの

でした。

そんなときに、大学の博物館で奇妙な
楽器に出会った。木製の、木をそのまま
杖にしたような単純なデザインの笛。クル
ムホルンという古楽器で、ちよつと吹
いてみたら、今まで体験した音と全然違
う。音階も何も無い。指で穴を押さえた
感じがそのまま音楽になるといふかね。
でも、ホッとするような「あ、楽器つ
て、これでいいんだ」と思った。

同時に、子ども時代の音の記憶が甦つ
た。山のなかで遊びながら、ふと耳を澄
まして音探しをした。海の音に心を奪わ
れた。あるいは、道端でらくがきをしま
がら友だちと歌ったときの楽しさ。ドミ
ソもドファラもないけれど、あはれはみん
な、自分にとっての音楽だったと気づい
たんです。



もつとも、何より、一度絶滅した古楽器にはこれといった演奏のセオリーがないのがよかった。教える人なんかいないから、自分流で勝手に演奏しても、誰にも何も言われないですみますからね(笑)。当時はまだ、復元する人も少なかったの、自分で絵を見ながらブサルテリーという弦楽器を作ったりしていました。写真で手にしているのが、それです。

その後、大学を卒業して、高校と音大予備校で音楽を教えていたときにもまた、同じような感覚にとられます。音楽が好きで音大を目指しているはずの子どもたちが、音楽を心から楽しんでない。みんな、まるで追い立てられるように技術を磨いていた。音楽ってこんなもんじゃないって、日本の音楽教育への疑問がむくむくと湧いてきたんです。

音楽は、心と心で響きあう 言葉を越えたおしゃべり

そんなときに、今度は古楽器ではなくて、一三世紀フランスの吟遊詩人が作った歌に出会った。中近東から西欧へ、十字軍による戦利品を背負って運んだロバ君を歌った長い歌なんです、その一〇番に「下手な歌声、夜空に響き、すべての人を優しく包む」という一節があった。

ロバは、西欧では「間抜け」の代名詞のようになっています。そのロバの歌声が人を優しく包むって、この吟遊詩人は

何を伝えたかったんだろう？

そんなことを考えるうちに、自分が抱いていた音楽教育への疑問の正体が見えてきた。きつと、千年近く昔の西欧でも競争はあって、人々はそれなりに追い立てられるような生活をしていたと思う。それがロバ君の歌で癒される。音楽っていうのは、上手い下手じゃなくてハートなんだ、心が響きあう会話なんだ、それが教育の場で消えている。

当時、一九八〇年代ですけども、日本ではすでに人間関係が希薄になっていくといわれていた。音楽なら、温かくて心地よい人間関係を復活させられる、そういう子どもたちの新しい音楽を創りたい。もう、一刻も無駄にできないような気がして、仕事を全部やめて、共鳴してくれる仲間と一緒に「ロバの音楽座」を立ち上げました。

もちろん、最初の二、三年は大変でした。なにしろ楽器も、皆さん、見たことのないような古楽器ですからね。保育園や幼稚園に行っても、「人形劇ならともかく、そういう音楽会はやったことがないから、ちょっと」というのが、大方の反応。でも、私たちは、私たちの音楽が子どもの宝になると確信していた。熱意のなせるワザですかね。とにかく一度やってみようというところが出てきて、そこが「来年も」という話になってきた。

「子ども劇場」という子育ての全国ネットワークが応援してくれたことも大き

かったですね。それで全国にわっと広がった。

使う楽器は古楽器だけではありません。ラップの芯や紙パック、新聞紙など手近なもので、いわばリサイクル楽器を作るワークショップもやっていますし、毎年夏に行う合宿では、子どもたちの身体も、自然の音も、みんな共振する楽器です。

そういう私たちの音楽に、小学生が「懐かしい」って言うんですよ。ドミソもドファラもない、身体と一体となつて出てくる音に、「なんか、懐かしい」って。どんなに時代が変わっても、子どもたちには原初的なものをとらえる感性がちやんと生きている。こう、細胞に直接響いて、それをしつかり受け止めているんですね。

「古い」+「新しい」 そこに未来の希望がある

今年は、スタートからちょうど二十五周年。それを記念して「らくがきブビビのコンサート」を全国で上演しています。「落書き」は「楽書」とも書くそうです。間違ひなんか恐れなくて、遊びながら楽しみながら自由に書く。「らくがき」をするように音楽を遊べたらどんなに楽しいだろうと、言葉や意味にとらわれずに、観客自らが物語を創りだすコンサートの試みでした。

そこに、古楽器に加えて、私と彫刻

家・中里繪魯洲氏とのコラボレーションで創った「ラクシャ」というオリジナルの空想楽器が登場しました。外観は未来ロケット風。中をあけるとダンボールの素朴な表情が表れます。古楽器の「古い」と空想楽器の「新しい」。どちらも子どもたちが一番好きな世界で、両方あると非常にバランスがいい。「懐かしい」という音楽への原初的な感性を花開かせながら、それを新しいものに結実させていけたら、最高です。

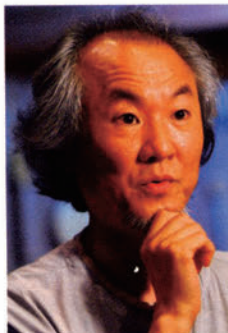
この動きは今、世界的に始まっているように思います。とうのも、古楽器は、私たちがクルムホルンに出会った頃に比べて、格段にオリジナルに近い形で復元されるようになっていっている。古楽器を演奏する人も増えていきます。一度絶滅したものが復権して、現代の楽器と共存する。自然にお互いの交流が始まって、新しい音楽が生まれてくる。ノンジャンルと呼ばれる音楽が目立ってきたのも、その現れではないでしょうか。

私たちは、十数年前に東京・玉川上水に「ロバハウス」を開設したのですが、ここでもコンサートやワークショップをやっています。子どもたちは、部屋中にある古楽器を手にとっては、触ってみる、吹いたり鳴らしたりしてみます。初対面で、お互いに言葉ではほとんど話さなかった子ども同士が、楽器の音でおしゃべりを始める。あるお母さんに言わせると、「まるでお菓子の家に来たみたい」。

ロバハウス全体がワクワク感に満たされるんです。

さつき、「人間関係が希薄になっている」と言いましたけれど、こんなふうに子どもたちと一緒に音楽の「らくがき」をしていると、「大丈夫、未来は明るい」という思いが湧いてきます。

子どもたちはゲームばかりやっているように見えるけれど、チャンスがあれば、それをばつとやめて、別の世界に飛び込める。一方で、「自分は何が好きか」ということを見つけ出すチャンスが、二〇世紀の頃に比べて格段に増えている。それを、もっともつと伸ばしていきたいですね。



まつもと・がりゅう

1952年福岡県生まれ。音大在学中の73年に、中世・ルネッサンス時代の古楽器を演奏する「カテリーナ古楽合奏団」を結成し、82年に「ロバの音楽座」をスタート。「ロバの音楽座」として、NHK教育「からだであそぼ」「パンツばんくらう」やジブリ作品「ゲド戦記」などの音楽に参加する。

INFORMATION

木の温もりが活きるロバハウスでは、随時ワークショップやライブを行っている。多摩モノレール・玉川上水駅から徒歩数分。

問い合わせはTel.042-536-7266

<http://www.roba-house.com>